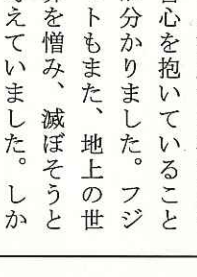
MET 文化を探求しよう！
～崖の上のポニョ～

「崖の上のポニョ」を通して、現代文化を探求しよう

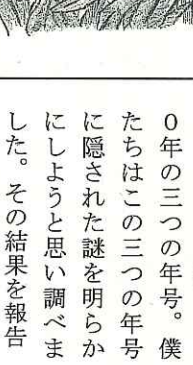
３・１１を経た今、崖の上のポニョは少なくとも数年間、決してテレビで放映されない映画となりました。それほどポニョの引き起こした津波は、大きな災害をこの国にもたらしたのです。ワーグナーのワルキューレにのってポニョはやってきました。文化と文化が出会う時、出会い方を間違えると大きな災いがそこに生まれます。文化という言葉は、私たちの常識や当たり前を指します。でも、まったく違う常識を持つ人も世界には、そしてあなたの隣にも、存在するのです。自分には理解できないその文化を「まるごと認める」ことができた時、私たちはシューマンのハッピーエンドを聞くことができるのです。あなたは、すぐそばにいる、あなたと違う友達という存在を、まるごと認めることができますか。ポニョと同じ世界で、共に暮らすことができる、ということを願ってこの映画を作ったと思います。皆さんもぜひ、監督の込めた想いを感じながらこの映画を観てください。



ポニョと人魚姫

私は人魚姫をテーマに「崖の上のポニョ」のストーリーを比較しながら、違いやメッセージを探求した結果、『魂』が重要なキーワードになっていることがわかりました。この作品の監督である宮崎駿は、ある映画祭の記者会見で、「９歳の頃、初めて読んだ本が人魚姫であり、そこにある『人間には魂があるが、人魚は“物”であり魂を持たない』という価値観に納得が行かなかったことが、ポニョの起点なのかもしれない。」と言ったのです。そこから宮崎駿は、人間だけに魂があるのではなく、あらゆる物との絆や愛の大切さを伝えたかったのではないかと思います。そしてそれは「人間と自然の共生」というメッセージにつながるのです。

★登場人物①★
宗介



The secret of sosuke、宮崎駿は、崖の上のポニョを作るのに夏目漱石の「門」という本を参考にしました。私達はこの本を読み、宮崎駿の伝えたかったことを考えました。門の主人公野中宗助は、映画の宗介の元となった人物です。門の中の野中宗助は過去の罪に縛られ、崖の下で隠れ過ごし暮していました。しかし、映画の宗介は、崖の上に暮しています。この違いとは、生き方の違いにありました。門の宗助は、自分は意味なく生まれたと考え過去を繰り返し生きていました。しかし、崖の上のポニョの中の宗介は、自分は意味があり生まれたと考え、未来へ繋げていきます。この宗介の生き方こそが、宮崎駿の伝えたかったメッセージではないでしょうか？

★登場人物②★
ポニョ

ポニョの本名はブリュンヒルデといいます。ブリュンヒルデというのは、ワーグナーの楽劇「ワルキューレ」にでてくる戦娘の長女の名前です。ブリュンヒルデはこの劇中で、眠りの魔法をかけられてしまいます。この魔法を、ジークフリートという恐れを知らない勇敢な人物が解きました。この話は崖の上のポニョと重なり、ブリュンヒルデとは、名前の通り、ポニョと重なり、また、ジークフリードとそうすけが重なります。つまり宮崎駿は、僕たちにそうすけの姿を通して「恐れず勇敢に戦い生きていくことが大事」だということを伝えたかったのではないでしょうか？

★登場人物③★
フジモト

この作中に登場するフジモトは、ジュール・ヴェルヌが書いた「海底二万里」という本に登場する潜水艦の船長、ネモ船長がモデルであることがわかりました。しかし、このフジモトはネモ船長そのものだと考え、ネモ船長の意思が読み取れる文を抜き出し、フジモトに託されたメッセージを探っていきました。調べていく中で、ネモ船長は過去に家族や親友を権力者に殺され「抑圧する者」に復讐心を抱いていることが分かりました。フジモトもまた、地上の世界を憎み、滅ぼそうと考えていました。しかし、５歳の子供であるそうすけを通して地上に再び希望を見て、娘であるポニョを送りだしたのです。

★登場人物④★
グランマンマーレ

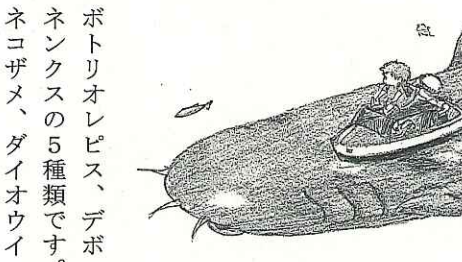
この絵をご覧ください。ポニョのお母さんであるグランマンマーレは、ハムレットに登場しているオフィーリアを描いた絵がモデルです。夏目漱石の草枕

にも影響を与えているその絵には川で浮かぶ女性と、さまざまな花が描かれており、一つ一つの花には花言葉としてメッセージがこめられています。たくさんの愛や悲しみ、苦しみを表す花々に囲まれたオフィーリアの絵をモデルにしたグランマンマーレはポニョと作中の花に関係があることや、オフィーリアとは対照的な花言葉を持つ花に囲まれたポニョの別の生き方のようなものを表しているのではないかと考えました。」

ポニョに描かれた「花」

私は「崖の上のポニョ」に描かれた「花」を調べ、そこに隠された意味を探究しました。１つ目はグラジオラスです。グラジオラスには「情熱的な恋」という花言葉があります。これはポニョのそうすけに対する情熱的な思いと重なります。２つ目はひまわりです。ひまわりには、太陽の神に恋をした海の精が、太陽を見つめ通し、ひまわりになってしまうギリシャ神話があり、これは車いすに乗ったひまわり園のおばあちゃんたちと似ていて、そこに、宮崎駿の「憧れを抱いているのなら勇気を出して一歩を踏み出してほしい」というメッセージが込められていることがわかりました。物語の中で、自分の思いや、メッセージを様々なものを通して、伝える。これこそが、宮崎駿の感性なのだと感じました。

年号



命の水を溜めている容器に書かれた１８７１年１９０７年１９５０年の三つの年号。僕たちはこの三つの年号に隠された謎を明らかにしようと思い調べました。その結果を報告します。まず藤本のセリフと命の水をコラボさせて考えてみると人を滅ぼすものは人の憎しみや悲しみだという事。命の水は人の憎しみなどがが集まったときにできるものだということが分かりました。ではその憎しみが集まる出来事とは何かというと、１８７１年の解放令にまつわる身分差別。１９０７年の足尾銅山による環境汚染。１９５０年に始まる朝鮮での戦争。この三つです。このような出来事が命の水を大量に集め、この命の水が集まると人類は滅びると藤本を通して宮崎駿は言いたかったのだと思いました。

深海魚

深海魚や古代魚が登場するシーンは２種類あって、登場する魚はネコザメ、ダイオウイカ、ディプノリンクス、ボトリオレピス、デボネンクスの５種類です。ネコザメ、ダイオウイカは海水の深海魚で、ディプノリンクス、ボトリオレピス、デボネンクスは淡水の古代魚ということが分かりました。古代魚の中でも、ディプノリンクス、ボトリオレピスは実在する生物で、デボネンクスは宮崎駿監督オリジナルの空想の古代魚だということが分かりました。デボネンクスはジンベエザメがモデルの古代魚で、ポニョにしか名前が分からないということがわかりました。はたして観客にはこの違いは区別できるのでしょうか。

波の曲

ポニョは人間になろうとすることで「本当の愛」を求めたのでしょう。ポニョが波にのってそうすけの所に行くシーンの曲はワーグナーの『ワルキューレの騎行』と似ています。戦娘を意味するワルキューレにはポニョの本名と同名のブリュンヒルデという娘がいます。彼女は「本当の愛」を求めます。ワーグナーの父はユダヤ人だという説もあるのですがユダヤ人音楽家を否定する論文『音楽におけるユダヤ性』を書きます。差別をうけるユダヤ人を自ら否定して「本当の愛」を得ようとしたのでしょう。ワグネリアンのヒトラーはオーストリア人でしたが後にドイツの総統になります。母国にいた頃彼は浮浪者で暮らしは不幸でした。そして母国に宣戦布告したドイツの兵に志願します。彼も敵国側について「本当の愛」を得ようとしたのでしょう。

主題歌

この曲を歌っている藤岡藤巻と大橋のぞみですが、藤岡藤巻は昔まりちゃんずというグループでコミックバンドを組んでいました。このバンドはリリースした曲のほとんどが放送禁止になってしまうような武勇伝を持つバンドですが、だからこそこのバンドのメンバーである藤岡藤巻の二人を大橋のぞみとは対照的な存在として起用したわけです。この曲は主題歌のルーツとなった、シューマンのピアノ曲の「楽しき農夫」という曲です。波の曲

を作ったワーグナーとは対立していたそうです。この２曲を使ってワーグナーで始まり、シューマンでハッピーエンドを迎えるという物語を作り上げたのです。